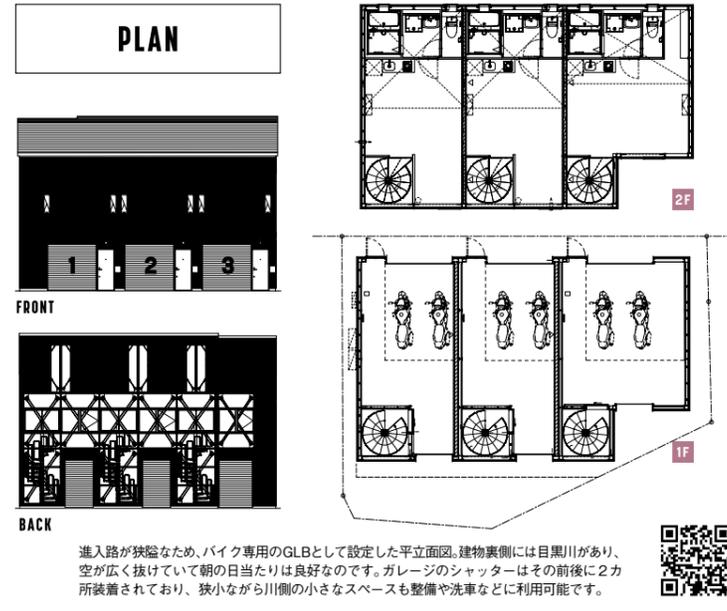


Text/Atsushi TAMADA



進入路が狭いため、バイク専用のGLBとして設定した平立面図。建物裏側には目黒川があり、空が広く抜けていて朝の日当たりは良好なものです。ガレージのシャッターはその前後に2カ所装着されており、狭小ながら川側的小さなスペースも整備や洗車などに利用可能です。



東海道五十三次が一番最初の宿場町と言えば品川です。今回はその品川の河口の密集地に突然出現するバイク専用GLBのお話です。

品川の地は20世紀の都市の急激な増殖に包含されて東京の一部になってしまいましたが、江戸時代、この場所は目黒川、蛇崩川、呑川など多くの川が流れる田園地帯でした。湿潤な河口ののどかな風景が目につきます。江戸時代には天然の中州であった『天王洲』を黒船からの防衛のために第四のお台場(砲台)にする埋め立てを当時の幕府は計画しました。しかしこれは途中で中止。その後、埋め立てを再開して工業化の最前線の場所として利用。近代の目黒川河口は巨大なガラス工場やペンキ工場などが林立する工業地帯に変貌しました。

時は移って、その後1980年代に東京都が『運河ルネッサンス』と銘打って、この場所をウォーターフロント開発の目玉として計画。その代表的な場所がいわゆる『天王洲アイランド』です。もともと東京オリンピックの時に創業した『東京モノレール』は、当時のレトロなイメージが付着していましたが、天王洲アイランドの操業で一気に近未来イメージを復活させました。天王洲アイランドの完成以降、高層マンションが林立して多くの人口を抱えたウォーターフロントの“人が住む場所”になっています。

一方で、松本清張のファンならば映画『砂の器』で、主人公の加藤剛の子供を身ごもった島田陽子がひっそりと住むアパートの風景。まさに昭和の日本を象徴する景色とも言えるのです。このようにこの地は江戸以降の東京の歴史の様々な要素が重層的に混在した場所なのです。ここにバイク専用のGLB『BIKER'S HANGAR』が計画中なのです。江戸時代から近未来まで、いろんな要素の入り混じった空気感を切り裂くオートバイのエンジン音とアジト感覚。まさに“21世紀のTOKYO”を実感するには最適なロケーション。

このガレージアパート建築は、侵入通路が狭陰であるためにバイク専用で設定しています。それでもこの魅力的な場所には、十分なニーズがあると判断しています。2Fの窓からは目黒川が見え、そして、この対岸には桜並木。春には突然華やいだ風景も見せてくれることでしょう。交通が便利であるだけではなく、歴史や人間の苦闘の跡が染み付いた場所の面白さ。それを丸ごと商品化して楽しんでしまう企画がGLBの最新形として成立します。時代の変化の狭間に成立するような賃貸建築企画。建物そのものが“都市論”的なのです。バイクで路地を縫って帰宅するあなたは、歴史を縦断して東京を味わい尽くすことができる。実に面白い環境だと思いませんか？

運河(目黒川)と、周辺の住宅密集地をドローンで撮影した空撮イメージ。接道面の狭陰道路や、目黒川サイドの抜け感がよくわかるビジュアル。まさにアジト感と開放感が共存した場所なのです。付近には庶民的な定食屋も多く、下町情緒も十分に楽しむことも可能です。



# 東京の湾岸地域に突如出現する バイク専用GLBの アジト感と楽しき可能性

桜が咲く目黒川沿いに突如現れる誕生するバイク専用GLB。その時代を先取りした可能性について考えてみました。

デイトナが提案する  
新しい建築のカタチ



2階の居室はGLB特有の吹き抜け空間を持った居室。目黒川方向の“空抜け”は実に良好で、都会の中心部では川沿いでしか得られない環境です。またGLBの特長である螺旋階段は、ガラスウォールで区画されており、2階の空調環境が損なわれないよう配慮しています。

伸びやかなガレージ空間は、都会の真ん中で複数台のオートバイや自転車を格納したい人にとってはまさに垂涎の空間。品川は首都高速都心環状線や湾岸線のジャンクションにもなっており、出撃基地としてはこの上ない立地なのです。



## What's DAYTONA HOUSE?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのは軽鋼鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm~4mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表 玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

[www.daytona-house.com](http://www.daytona-house.com)



能動的に移動する手段(クルマやバイク)を住居に内包するガレージハウス。血肉化したモーターライフをエンジョイし、動きながら考える生き方を快とする種族のことをデイトナハウスでは「遊動民」と名付けています。そしてリモートワークも駆使しながら、多拠点生活を実現する遊動民の住居形式としてのGLB。自らの身体を担保にしたり、生涯年俵を皮算用してローンの残った住宅に自分を縛り付ける必要はない。そのムーブメント=「いちぬけた」が今始まるようになっているのです。テーマはFREEDOM 2.0。それは21世紀仕様の「自由」なのです。

このように経済成長、特に20世紀後半に第二次大戦後の高度経済成長を相対化する考え方が出てきたのは、21世紀もすでに20年が経過してやや距離を置いて客観的に過去を見ることのできるようになったからだと思います。そして私たちが住む日本は、最も高度化が進行した、これ以上経済成長しない、また上級必要もない国として描かれているのです。高原社会、

20世紀、経済成長をテーマにしてきた人類が、21世紀に入って到達した新境地「高原社会」とは何か？

20世紀は破壊と再構築の時代でした。特に日本においては、第二次世界大戦で国中の大半が焼け野原になったのですから、20世紀後半はその再構築過程において高度経済成長するのはむしろ当たり前であったとさえ言えます。何しろゼロから復興するのですから。また、終戦直後の「食糧や食わず」の段階では都市の中心に再び価値が集中するもの、ある意味自然の現象であったかもしれません。そしてその後の高度経済成長、何もない状態からマイカーや白物家電を買いそろえることが目標であり、喜びであった時代が確かにありました。

私のような昭和世代の20世紀少年はまさにその時代に育ってきたのです。しかしその後、全国に都市化と過疎化が行きわたった後、1980年代後半のバブル崩壊以降、その成長率の数字が低調になったことで、失われた〇〇年、という言葉が誕生しました。その言葉が2020年代でもいまだに用いられています。まるで経済は無限に成長するのが正常な状態であるかのような

言い方です。しかし、本当にそうでしょうか？ 私たちは経済成長を今後も続けなければならないのでしょうか？ その疑問を感じる人は多く、コロナ禍を境に、「社会は生存のための物質的な基本条件をすでに整え終わったのではないか？」という意見が散見するようになりました。すなわち、もうこれ以上の経済成長は望めないし、必要ないのではないかと。という考えです。ここにその代表的な書物があります。タイトルは「スローダウン/減速する素晴らしい世界」というイギリスの地理学者ダニエル・リンクの著作です。この本では、世界人口から始まって出生者数、経済成長率、住宅ローン、自動車ローン、学生ローン、本の出版部数に至るまであらゆるものが2010年を境に減少/スローダウンしていることを非常に多くのデータを引用して述べています。このよな成長率の鈍化、または減少が一般化する社会を「高原社会」と呼んでいます。山の頂き/ピークに向かって登り続けてきたら、突然花が咲き乱れる高原の大平原に出た。というシーンを想像してみてください。もう汗水たらして頂上を屈指さなくてよい。ゆっくり高原に咲く草花や虫たちの乱舞を楽しめばよい。というイメージです。

この定義を再度確認しましょう。それは「生存のための物質的な基本条件をすでに整え終わった社会」というものでした。失われた〇〇年、という強迫観念的なキャッチフレーズと違って、少し心が安心するような境地です。世の中にはAが今後、長足の進歩を遂げて、更に高度に発展が加速するという論調(シンギュラリティ)もあるのはあります。しかし、私はデイトナ読者の方々とこの連載を通じてコミュニケーションする中でこの「高原社会」の到来について考え方に「遊動性」を強く感じているのです。一般に「遊動性」として「他者の過剰な差異付け」への欲求がエスカレートすると、いわゆる成金趣味的な宜しくない印象を醸出します。デイトナ読者の動機はそこにはない。むしろ自分の個性として人肌のクルマやバイクとの共生を求めるイメージが強い。主流の今後、時代と共にエンジニアの形式や主流の性能表示は変化していくかもしませんが、そのベクトルの方向性としてはむしろ、高原社会特有の豊かさ、を志向するものではないかと考えています。

デイトナハウスの「遊動性」がキーワード。高原社会について述べた本は、前掲のもの以外にも多く出版されているのですが、案外、高原社会の豊かさと楽しさ、どのよなスタンスで生きていくべきか？などを表現している箇所は具体性に欠け、抽象的で茫洋としているのです。そこでデイトナハウスではさらに「一歩突っ込んで」、具体的な生活スタイル/キーワードを提示したいと思っています。

それは以前の連載でも何度も述べてきた言葉、「遊動性」です。高原社会は「定額経済社会」では、差異付けがはつきりせず、モノの変化が乏しい社会であることには否めないと考えます。経済や所得が今日より明日、明日より明後日と伸びていった高度成長期の有頂天はもうありません。しかし、高原社



従来の賃貸アパートと違って、アクティブな「出撃基地」とも言えるGLBは、自然環境が豊かで、アウトドアスポーツ拠点としての「価値」が高い場所に徐々に増殖し始めている。写真は雪を頂く八ヶ岳を望む縄文文化のメッカ=茅野GLB。見るからに豊かで美しい風景に存在します。

す。あえて土地価格の上昇を前提として時間を先払いするシステムなのです。そう考えるという意味で極めて20世紀的な制度であったと言えるかもしませんが、自分を土地に縛り付けるということは、つまり遊動性がなくなるということですから、上手に賢いローンの利用法が必要なのです。過度に住宅ローンシステムに依存することなく、むしろ意識的に遊動性を確保することで、高原社会を楽しむ元気に生きていくことができるのではないのでしょうか？

デイトナハウスのガレージハウスは、そもそも移動手段を住居に内蔵する形式でつまり元々、遊動性がテーマです。また、GLB等の賃貸住居形式は、自然が豊かな場所での二拠点生活のプラットフォームとしても提案しています。今後、価値の高い自然環境豊かな場所でのGLBも、ますます増えしていくことでしょうか。また、更に自然と隣接した場所での建築には、コンクリート基礎を必要としない高床式住居タイプFで、斜面や森の中でも建築可能なです。オルタナティブな価値観「いちぬけた」を提案するデイトナハウスの利用可能性。高原化する社会で、二気気に楽しく生きていくための「道具」になるべく、これからも努めてまいります。



周辺の自然環境をできるかぎり破壊せず、自然に寄り添う建築を今後のライフスタイルは要求すると考えられます。写真のようなデイトナハウスの高床式ノウハウは、森林の樹木を極力伐採せず、コンクリートを一切使用しない建築工法です。この生活態度こそが今後「スタイル」と呼ぶにふさわしいのではないのでしょうか？ つまり哲学に裏打ちされた生き様の名称なのです。

# 来るべき経済成長なき社会=“高原社会”を豊かなものにする デイトナハウス独自のキーワード「遊動性」

経済成長率が鈍化した社会を悲観する必要はない。必要なものはすでに満たされてしまった……。という考え方を「高原社会」のイメージについて、コロナの中間的な総括として、デイトナハウス独自の見解を交えて考えてみました。

Text/Atsushi TAMADA



「高原社会」のイメージ。険しい山の頂にむかって懸命に登山していたら、目の前に突然広々とした高原が広がった状態を現状の経済成長率になぞらえた例え。右肩上がりの成長はすでに望めませんが、日当たりの良いお花畑のような高原で、別の価値観を見出すことができるかどうか？それが今後の先進各国の課題で、そして日本の社会は最も典型的な「高原社会化」のサンプルと言われています。

ある意味、コロナが立ち止まって考えざるを得なかった。昨年からのこの連載でもコロナ禍の影響による生活の変化を、デイトナのモーターライフに引き付けて取り扱ってまいりました。コロナ以前とコロナ以後の最も大きな相違点は、何と言っても「リモートワークの普及」によるライフスタイルや常識の変化だと思えます。

デイトナ読者やモーターライフ・フリークには、もともと満員電車による通勤が大嫌いなという人が多い傾向にあります。かく言う私自身もできれば満員電車に乗りたくない人間であることもあり、総じてコロナパンクを前向きにとらえるイメージで遊動性のある生活を実現してきました。考えてみれば、そもそも、移動を単なる身体を別の場所に移し替えるということでは

はなく、移動時の時間や風景の変化、空気のイメージの変化を楽しむ素質のある人がいなくなるクルマ好き、バイク好きと呼ばれる人種ですから、今起こっている社会の変化はそのような人種にとっては、とても重要なことなのです。つまりコロナは、移動についての根源的な考察の機会を与えてくれたということなのです。

コロナは人々に「密」であることを相対化する視点を植えつけた。コロナがある程度収まりつつある現在でもTV報道は連日「密を避ける」と繰り返します。しかし、そもそもこの「密」とは何でしょうか？ 大雑把に言えば、「ステレオタイプ」の価値観に、「二気」に多くの人が集まる状態」ということでしょ。ステレオタイプの価値観とは何か？ 例えば安い、早い、お得、流行っているなど、最大公約数

的にわかりやすい快楽原則です。そしてそのわかりやすい欲望の集積である。大都市は、そもそも「密なるもの」だということなのです。つまりコロナは原理的に「都市化に反するもの」ということなのです。

20世紀の社会形成の特長は価値の中心を先に据えて、そこに情報やお金を極端に集中させるということなのです。NYの摩天大楼の写真が示すのは、それらが集中する場所としてその地面を上の方向に、盛り蕎麦のように積み重ねていくということなのです。それが高層建築。近代建築が可能にした高層建築は摩天大楼は土地の価値を増殖技術にすぎず、地面の立体的増殖はすなわち欲望の立体的増殖なのです。

また、人の生活スケジュールも単一の価値観で統一されてきました。都市の中心に同時に人々が殺到する状態、これがラッシュシニアワーの通勤電車です。息もできない

ほどの寿司詰め。20世紀的な価値観では、この殺到がむしろ羨望の的でカッコイイものというイメージさえ付与されアメリカでは「ニューヨーク」な言葉まで生み出されましたが、コロナパンクはその神経の麻痺や狂乱に冷や水をかけて冷却してくれたともいえるのです。

また20世紀は鉄道インフラの時代でもありました。歴史を辿ると19世紀末に敷設を始めた鉄道インフラは、20世紀に入ってから都市の中心から同心円状に増殖を続けました。その路線はそのまま土地の価値/中心からの距離の物差しになっています。鉄道網は土地の価値を中心からの距離によって序列化することに寄与したのです。しかし、コロナパンクはその物差しを無意味化する方向へ推し進めたとも言えるのです。

デジタルネットワークの進展は、中心から、周縁、という20世紀的な同心円の社会を、点と点のつながりのネットワーク社会に変化させた。

コロナはそれまで動時進歩を続けていたデジタルネットワークを一気に加速させました。その結果リモートワークが一般化したことで、必ずしも距離と関係なく会話やビジネスが成立するようになったのです。昔の日本のスリラー映画で「電送人間」(1960年東宝 特撮監督田代百合子)というものがあります。旧陸軍の二木博士が人間を電線網を使って移送する機械を発明し、それを利用して殺人者が姿をくらますという特撮映画です。テレポーターションという物体電送体と呼んでいました。しかし驚くべきことに今や、個人所有のスマートフォンで画面に映る人間同士が、距離を越えて瞬時に会話やビジネスを行うことが当たり前になったのでしょうか？

中心から同心円状に広がる鉄道網の序列ではなく、距離と関係なく点と点を結ぶネットワークの時代の到来、コロナ禍はこの変化を一気に進展させてしまったのです。

そしてこの変化は不可逆的。つまり、元に戻ることはないのです。当然、中心からの距離の相対的な価値ではなく、いろんな価値が無作為に飛び交う時代。価値の多様化が名実ともに実体化するのです。その時、不動産の価値も従来の「設備」という指標を離れて、実質化するでしょう。本当に価値のある土地、が現状では過小評価される場合もあるのです。中心からの距離、や、便利さ、ブランド性、だけが価値の指標ではないからです。その意味では20世紀は案外と単純なルール設定が通用していた時代とも言えるかもしれません。

